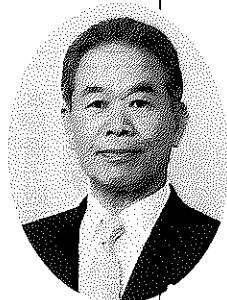


「戻ってきた日常」



総本部長 地藏哲朗

明るい笑顔で受け答えしているのがとても印象的です。

「遂げずばやまじ」

「遂げずばやまじ」目標を持ったら成功するまで絶対にやめない。という固い決意の言葉があります。春日山懐古でおなじみの大槻磐溪の父で、日本の蘭学の先駆者大槻玄沢は、この言葉を自戒の語として体現していたひとで。「およそ事業は、みだりに興すことあるべからず。思いさだめて興すことあらば、遂げずばやまじの精神なかるべからず」事業というのは気ままな気持ちで始めてはならない。心に深く決意して事を興すなら、何があっても必ずやり遂げるという強い思いを持って始めなければならぬ。といいます。

関西吟詩は昭和9年1月、宮崎東明先生をはじめ7名が発起人となり、「詩歌吟詠活動そのものが国の伝統芸の伝承と、国民の精神文化の向上発展に寄与している」と固く信じ心に深く決意して「関西吟詩同好会」を興さ

立春の2月4日、吹田のパナソニックリゾートで「第10回吟道大学講座」が開催されました。実に3年振りになりましたが全国各地から参加された120余名の皆さんは「戻ってきた」「待ち兼ねた」と意欲満々で、コロナ禍で消沈していた雰囲気を一掃してくれました。1泊2日のカリキュラムの第1講は、霊山歴史館の木村幸比古先生の「志士の心」と題した講演で、江戸末期諸外国の侵略を阻止し、我が国の近代化を成し遂げたのは、全国各地で草莽崛起した若い志士たちの「己を捨て、国を想う熱い心」が原動力になった。とのお話は、まさに「関西吟詩の苦難」に立ち向かいあらゆる困難を排して「自律自助」を実践している参加者各位の熱い心に共鳴するものだと思えました。思えばこの3年間コロナ禍に翻弄されましたが、ここへきて社会全体も、日に日に活発になってきました。地方の祭りや諸行事、スポーツイベント、海外からの旅行者も着実に増えてきました。みんな口を揃えて「やっと戻ってきた」と

れました。爾来、先の大戦による混乱を始め幾多の困難がありました。歴代会長を中心に先輩諸先生が真摯な努力を積み重ねてこられ今年で90年になりました。不肖、私は6年前の平成29年第13代総本部長に任命され、「志ある者は、事、竟に成る」の強い信念をもって業務遂行に当たります。とご挨拶しましたが、まさに「遂げずばやまじ」の精神の縦糸を紡いできたのです。

この6年間は色々なことがありました。最初の年には第11代曾根会長提唱の『温故新生』のスローガンに、「視座を変えて」の合言葉を付加しました。視座とは、本部と地区連合会・各会が、相互の立場を理解して課題に向かう事。公益事業は、本部事業のみに捉われず、幅広く推進する事。当面の採算だけでなく中期的な採算改善に取り組む事など、「根幹の問題について、多面的・多角的な角度から、長期的な視野で」判断する事を目指して参りました。その後2期目には、スローガンを「自律自助」(活力ある毎日を目指して)に変えて、執行部・理事ひとり一人の規範・行動を、「関西吟詩の発展のため」に置く事を求めて参りました。また一方長年の宿願である、「本部会館リニューアル」、「定年制度の見直し」など中期課題に鋭意取り組みました。新会館は狭いながらも充実した設備で、好評いただき各種研修会等で有効活用し経費削減にも貢献していますが、会館建設積立資金の残金を有効

活用して「財政の健全化」にも寄与する事にもなりました。

今振り返っても、常に「遂げずばやまじ」の精神で、「盤石な組織づくり」、「財政基盤の健全化」、「適切な運営体制の見直し」などを、真摯に求めて参りましたが、直近の2年間は予期せぬ障害にそれまでの常識を覆され、会員の大幅減少と財政悪化に繋がってしまったことは、誠に残念でありました。今、最重点課題として、「会員減少問題」「財政基盤の健全化」に懸命に取り組んでいるところであります。今後更に進むであろう、少子高齢化の流れの中で、多面的・多角的に長期的な視野で根幹の問題に挑戦していかねばならないと思います。コロナ禍の3年、失われたものは小さくないが歴史的に見れば「石火光中のこと」「失われた日々は、積み重ねられた経験の重み」ととらまえ、気分を新たに諸課題に挑戦して参りたいものです。

愈々創立90周年の年になりました。本年10月の近畿地区を皮切りに全国4地区(近畿四国・東海・中国・九州)で「創立90周年記念並びに公益社団法人設立12周年記念大会」を開催いたします。皆さまと一緒に歴史の重みをかみしめ、明るい未来に向け更なる発展を誓う記念大会にしたいものであります。

会員皆様のご理解とご支援ご協力を切にお願い致します。

以上